草船にて箭を借りる

羅貫中作・立間祥介訳『中国古典文学大系二六・三国志演義』（平凡社、一九六八年）

【解説】

後漢の末、中国は曹操、劉備、孫権の鼎立の時代を迎えていた。八十三万の軍を率いて長江を下る曹操に対抗するため、劉備は軍師・諸葛孔明を呉に送り、孫権と手を結んで曹操に対抗する。緒戦で敗北を喫した曹操は、蔡瑁・張允に水軍の訓練を命じる。呉の将軍・周瑜は、計略を使って曹操に蔡瑁・張允を殺させる。さらに周瑜はこの計略を見抜いた諸葛孔明を殺そうと、十日の間に十万の矢を用意するよう命じる。

第四十五回　三江口に曹操、兵を折たれ　群英会に蒋幹、計に中る

（前略）

周瑜が高みに登って敵陣を眺めると、煌々たる火の光が西の空を紅に染めている。

「あれはすべて北軍の篝火にございます」

と左右の者に言われて、思わず息をのんだ。翌る日、周瑜は自ら曹操の水上の要塞をさぐって来ようと思い立ち、矢倉をつけた兵船を支度させ、楽人たちを乗りこませると、腕の立つ大将数

名に強弓を持たせて随え、江上へ漕ぎ出した。曹操の陣に近づくと重石を下させ、一斉に楽の音をあげさせながらひそかに陣内をうかがったが、

「ううむ、これは水軍の奥義をきわめたもの」

と舌を巻き、

「水軍の都督は誰か」

と左右の者に尋ねると、

「蔡瑁・張允にございます」

との答え。

「あの二人は長らく江東におって、舟戦に通暁しておる。まずあの二人を除いてしまえば、曹操を破るのもたやすいものだ」

と考えながら、なおも中の様子をうかがっている。北軍では、

「周瑜が様子をさぐりに来ております」

と、早くも曹操のもとに知らせか飛ぶ。曹操は、ただちに引っ捕えよと下知した。周瑜は敵陣の旗さし物が動くのを見て、急いで重石を引き上げさせると、船の両側の兵士に一斉に櫓を押させて飛ぶように漕ぎ去った。曹操の陣中から兵船が繰り出したとき、周瑜の矢倉船は早くも数十里のかなたに遠ざかっており、追いつきようもないので、この旨曹操に復命した。

曹操は大将たちを集めて尋ねた。

「昨日は不覚を喫して鋭気を挫かれ、今日はまた陣内深く様子をさぐられた。どうして破ったも

のか」
　この言の終わらぬうち、つかつかと前に進み出た者がある。
「それがし幼少の頃より周瑜と同じ師についてともに学び、以来親しくしておりますれば、この三寸不爛の舌をもって江東へ乗りこみ、彼を丞相のご膝下に降参いたさせてご覧にいれましょう」
　曹操が大いに喜んで見やれば、現に幕僚をつとめる、九江の人、姓は蒋、名は幹、字子翼である。
「そなたは周公瑾と親しくしておるとな」
「御意。ご安心下されませ。それがし長江を渡りますれば、必ず仕損ずることはござりませぬ」
「して、何をもって行くか」
「供の侍童一名、櫓を押す下僕二人、このほかは何もいりませぬ」
　曹操はいたく喜び、蒋幹を送る酒宴をもうけた。蒋幹は葛布の頭巾、綿の長衣といういでたちで、一般の小舟に乗り、周瑜の本陣へ漕ぎよせると、番の者に申し入れた。
「昔馴染の蒋幹が参ったと取り次いでくれい」
　たまたま周瑜は幕中で協議していたが、蒋幹が来たと聞くと、
「説客がやって参ったぞ」
　と、笑いながら諸将を見渡して、ひそひそと何事かささやくと、一同は命を受けてその場を立

一 説客（ぜいかく）……敵軍への説得工作のため派遣される弁舌に優れた人物

ち去った。
　周瑜が衣冠を正し、錦の衣、刺繍したきらびやかな帽子をいただいた従者数百名を随えて、賑々しく出迎えれば、蒋幹は青衣の侍童一人を連れただけで、昂然として現われた。周瑜が進み出て挨拶をすると、蒋幹が言った。
「公瑾、その後変りはないか」
「子翼、ご苦労なことだな。遠いところを、曹操の説客としてやって来たわけか」
　蒋幹は血相を変え、
「何をぬかす。貴様と久しく会っておらぬので、こうしてわざわざ出掛けて来たのに、説客に来たかとはご挨拶だな」
　周瑜は笑って、
「おれも、師曠一ほどの耳は持たぬが、管絃の音を聞いてその心を知ることぐらいはできるぞ」
「それが昔の友達を迎える言い草か。おれはこれで帰る」
　周瑜は笑いながら、その腕をとって、
「これは悪かった。おれは本当に貴様が曹操の説客ではないかと思っていたのだ。そうでないのなら、何もそうつれなくせずともよいではないか」
　かくて、ともどもに本陣に入り、挨拶が終わって座に着くと、ただちに江東の英雄たちに挨拶

一 師曠……春秋時代の晋の国の楽師で、よく音色を聞き分けることで名を知られていた。

に出るよう伝えさせた。

間もなく、文官武将たちがそれぞれ錦の衣に身を飾り、幕下の将校たちがいずれも銀作りの鎧に身を固めて、左右に分かれてはいって来た。周瑜は一人一人引き合わせてから両側に居流れさせ、盛大な酒宴を開いて、勝利を祝う軍楽を奏させながら酒をすすめた、そのうち、周瑜は一同に向かって、

「これはわしの同窓の旧友じゃ。北から来たが、曹操の説客ではないから、疑うことはない」

と言い、佩剣をといて太史慈に渡すと、

「そなたはこの剣をつけて目付をせよ。今日の酒盛りは旧交をあたためるためじゃから、曹操と東呉の戦いについて一言でも言った者はこの場で斬って棄てろ」

太史慈は、はっと答えて、剣を握りしめて上座に着いた。蒋幹は胆をつぶして、口もきけない。

「わしは今度の出陣以来、一滴の酒も口にしなかったが、今日は昔の友達には会えたし、何の気がねもいらぬことゆえ、ひとつ思いきり酔ってやるか」

と言って、周瑜はからからと笑い、心地よげに盃を口に運び、席上の盃の行き来も次第に盛んになった。宴もたけなわとなった頃、周瑜は蒋幹の手をとって外に歩み出た。警護の兵士たちは、鎧兜に身を固め、戈を持ち戟をとって立っている。

「どうだ、わか軍の兵士たちは。元気なものだろうが」

「いかにも、虎か熊のようだ」

周瑜はまた蒋幹を本陣の裏手に連れて行った。目のとどくかぎり、糧秣の山である。

「どうだ、おれたもの兵粮は。たっぷりあるだろうか」

「ううむ。兵士は強く兵粮は豊かだとは聞いていたが、なるほどそのとおりだ」

周瑜は酔ったと見せかけて、からからと笑い、

「わしも、貴様と机を並べておった頃には、まさか今日のようになろうとは思わなかったぞ」

「いやいや、貴公の高才をもってすれば、このくらい当たり前だ」

周瑜は蒋幹の手をとって、

「大丈夫たる者、己を知る主君に会ったからは、外は君臣の義を守り、内は骨肉の恩を結んで、一度言った事は必ず行ない、命令には必ず従って、禍福をともにするものだ。たとい、蘇秦・張儀（戦国時代の説客）・陸賈・酈生（漢初の説客）が生まれかわって、懸河の弁をふるい、利刃の舌をもてあそぼうか、このおれの心を動かせるものか」

言い終わるや、からからと笑ったので、蒋幹の顔は土色になった。周瑜はふたたび蒋幹を連れて中にはいり、諸将と酒宴を続けたが、一同を指さしながら、

「これはみな江東の英雄ばかりだ。今日のこの会を、群英会と呼ぶことにしよう」

と言った。かくて飲みつづけるうちに夜になり、燭台に灯がはいると、周瑜はっと立ち上がって、剣をきらめかせて踊りながら歌を唱った。

大丈夫世に処して　功名を立て
功名を立てて　平生を慰む

平生を慰めて　吾将に酔わんとし
吾将に酔わんとして　狂吟を発す

唱い終わるや、満座の者たちがどっと笑いくずれた。やがて夜も深まり、蒋幹が、
「この上は、もう飲めぬ」
と言ったので、周瑜は宴席を片付けるよう命じ、大将たちも退席した。
「いや、子翼よ、貴様といっしょに寝るのも久しぶりだ。今夜は一つ床で寝ようではないか」
周瑜はすっかり酔ってしまったような振りをして蒋幹を寝床に連れて行ったか、着た物も脱ごうとせずに、床に倒れこむなりあたりかまわず食ったものを吐き散らした。蒋幹は寝られたものではない。横になっていると、陣中の太鼓が二更を打った。起きなおってみると、机上の燭台になお灯がともっている。周瑜を見かえれば、雷のような高鼾。ひそかに眺めまわすと、机の上に文書が積んであるので、そっと床を出て調べれば、いずれも書面ばかり。その中に一通、『蔡瑁張允謹封』と書かれた書面。はっと驚いて、すばやく読み下せば、

われらが曹操に降りしは、仕官を求めてにはこれなく、万やむをえざるがため。今すでに北軍を陣中に閉じこめし上は、おりのあり次第、曹操の首を取って、ご前に献上つかまつらん。近々、人をやって消息をお知らせいたすゆえ、なにとぞお疑いなきよう。まずはご返事まで。

「さては蔡瑁・張允は東呉に内通しておったのか」
蒋幹はそれを懐中にしまい、さらにほかの書面をも調べようとしたが、周瑜が寝返りを打ったので、急いで灯を吹き消して床にもぐりこんだ。すると、周瑜がもぐもぐと口を動かして、
「子翼、もう二、三日待っておれ。曹操の首を見せてやるぞ」
蒋幹がさあらぬていで調子を合わせると、彼はまたつづけた。
「子翼、待てと言うに。……曹操の首を見せてやるから……」
蒋幹が尋ねようとした時には、周瑜はまた眠ってしまった。そのままじっと床にはいっていると、四更も近づく頃、誰かがはいって来て、
「都督、お目覚めでござりますか」
周瑜は寝ぼけた様子で、その男に尋ねた。
「誰だ、ここで寝ているのは」
「都督殿が子翼殿をお誘いしたのではござりませぬか。お忘れにござりますか」
周瑜は悔やむていで、
「わしはついぞ酒に酔ったことがないのだが、昨日はすっかり酔って前後を忘れてしもうた。はて、何かいらざることを言ってしまったのではないかな」
「江北から人が参っております」
「しっ、声が高い」

と言ってから、
「子翼、子翼」
と呼びかけた。
蒋幹が眠っている振りをしていると、周瑜は足音を忍ばせて出て行ったが、じっと耳をすませば、外で誰やらの声がする。
「張・蔡両都督の仰せでは、すぐには手を下せぬが……」
その後は一段と声が低くなって、よく聞きとれない。やがて周瑜がはいって来て、また、
「子翼、子翼」
と呼びかけたが、蒋幹がいっこうに気づかぬ振りをして、蒲団を頭からかぶっていると、周瑜も着物を脱いで床にはいった。蒋幹は心の中で、『周瑜は細心な男だから、夜が明けてあの書面のなくなっているのに気がつけば、わしを生かしてはおくまい』と考えたので、そのまま五更までじっとしていたか、むっくり起きなおって周瑜を呼んでみた。しかし彼はぐっすり寝入っている。
そこで頭巾をかぶると、そっと外へ抜け出し、侍童を呼んで門を出た。
「これは先生、どこへおいでござるか」
番卒にとがめられたが、
「わしがおっては都督の邪魔になろうゆえ、これでお別れする」
と言うと、番卒も別にとめようとはしなかった。
蒋幹は舟に乗るや、飛ぶようにして曹操のもとにもどった。

「どうじゃった。首尾は」
「周瑜はしたたかな男で、言葉では動かすことはできませぬ」
曹操は怒った。
「よう仕おうせもせで、笑いものになって来おったのか」
「周瑜を説き伏せることはかないませんでしたが、丞相のために一つ聞きこんで来たことがございます。なにとぞお人払いを」
そう言って蒋幹は懐中より書面を取り出し、以上のことを逐一首操に話した。
「ううむ、にっくき奴」
曹操は烈火の如く怒って、ただちに蔡瑁・張允を呼びつけた。
「これよりただちに軍勢を出せ」
「まだ調練が終わっておりませねば、軽々しく出陣いたすはいかがかと存じまする」
と蔡瑁が言うと、
「調練が済んだら、わしの首を周瑜へ渡そうと言うのか」
蔡瑁と張允が、だしぬけに言われてわけが分からず、返答もできずにおろおろしているところ、曹操は引き出して打ち首にせよと命じた。間もなく、二人の首が供えられたとき、曹操は、はっと覚った。
「おお、計られたか」
後の人が、これを嘆じた詩に、

曹操が奸雄　当たるべからざるも
一時の詭計　周郎に中らる
蔡・張、主を売りて生計を求めしが
誰か料らん　今朝剣の下に亡びるを

大将たちは張・蔡両名の殺されたのを見て、そのわけを尋ねに来たが、曹操は心中計られたのを知りながらも、己の誤りを認めずに、一同に言った。
「あの二人は軍律を乱したので、斬って棄てたのじゃ」
皆は残念がったが、曹操は毛玠と于禁を択んで水軍都督を命じ、蔡瑁・張允に代わらせた。
間者がこれを探知して、江東へ知らせると、周瑜は大いに喜んで、
「わしの気掛りはあの二人じゃったが、もはや亡き者となれば、思いのままじゃぞ」
と言い、魯粛が、
「都督のかような策略をもってすれば、曹操ごとき苦とするにたらぬではござらぬか」
「皆の者も、このわしの計略には気がつかなかったであろうが、諸葛亮だけはわしの上じゃ。恐らく彼の目をあざむくことはできまい。貴公、ひとつさぐりを入れてみて下さらぬか。分かったら、すぐ返事を下されい」
正に、みんごと敵を計ったものの、はたのご仁が気にかかる、というところ。さて魯粛が孔明

を訪ねてどうなるか。それは次回で。

第四十六回　奇謀を用いて、孔明箭を借り　密計を献じて、黄蓋刑を受く

さて魯粛は周瑜に言われて、孔明の様子をさぐろうと舟を訪ねた。孔明は中に請じ入れて向かい合って坐ったが、魯粛の言うに、
「ここのところ連日軍務にとりまぎれて、心ならずも失礼いたしました」
「いやいや、こちらこそ都督にお祝に上がらねばならぬところでござった」
「なんと。お祝いとは」
「いかにも。公瑾殿がわざわざそれがしの心中をさぐらせに貴公をおよこしになった、例の事についてのお祝いにでござる」
驚いた魯粛は、思わず顔色を変えた。
「これは、先生はどうしてあれをご存知で」
「あの計略では、蒋幹を見事に手玉に取られたが、曹操はしばらくはあざむかれておろうか、すぐに気がつくに相違ござらぬ。もっとも彼は己の誤りは認めまいが。ともあれ、蔡・張の二人が死んだからには、江東ももはや磐石、お祝いするのが当然でござろうが。聞くところによれば、

曹操は毛玠・于禁を水軍都督に任命したとか、あの二人が、いずれは水軍を沈めることでござろう」

聞いて魯粛は開いた口がふさがらず、しばらく雑談してから暇を告げたが、別れに際して、孔明か固く念を押して言うのに、

「公瑾殿にはただいまそれかしの申したことを、決してお洩らしなされぬよう。これを知れば、きっと公瑾殿はそれがしを憎んで殺そうと考えられるでござろうからな」

魯粛は承知して帰ったが、周瑜に会うと以上のことをありのままに話したので、周瑜は仰天して、

「ううむ、どうあっても彼を生かしては置けぬ。必ず斬ってやる」

「もし孔明を殺したりいたさば、曹操から笑いものにされるでござろうが」

と、魯粛が諫めたか、

「もちろん、理由もなしに斬るようなことはせぬ。殺されても文句の言えぬようにしてやるのでござる」

「その理由とは」

「待たれよ。明日になればお分かりじゃろう」

翌る日、大将たちを本陣に集め、軍議を開くからと言って孔明を呼んだ。孔明は欣然として出席したが、席が定まると、周瑜が尋ねた。

「実は近々のうちに討って出ようかと存ずるが、水上での戦いには、どのような武器が最も役に

立つものでござろうか」

「広い川では、まず弓矢でござろうな」

「いかにも。それがしも左様に思っておりましたが、いかんせんわか軍の手持ちの矢が少なくなっておるので、ご苦労とは存ずるか、先生のお指図にて十万本ほどこしらえさせては下さらぬか。何分にもおおやけの用務ゆえ、まげてご承諾いただきたいのだが」

「都督のお頼みとあらば、喜んでお役に立たせていただきましょう。して、その十万本を何時までにご入用にござるか、一

「十日間ではいかがでござろうか」

「曹操の軍勢が明日にも寄せて来ようと申すに、十日もかかっては。物の用にも立ちますまい」

「しからば先生は幾日にてお納め下さるか」

「ただの三日にて、十万本たしかにお納めいたしましょう」

「合戦の最中に戯れ言は許されませぬぞ」

「何が戯れ言なぞ申しましょうや。三日にてととのえられねば、いかなる厳罰をも喜んでお受けいたしましょう。誓紙をお入れいたしても宜しい」

周瑜は大いに喜び、軍政司に命じて書付を取らせ、酒を出してもてなしながら言った。

「合戦が済んだら、また改めてお礼いたすでござろう」

「今日のところは、もはや間に合わぬゆえ、明日より造りはじめようと存じますが、三日目には兵卒を五百ばかり岸に差し遣わされて矢を運ばせていただきとう存じます」

かくて何杯か盃を重ねて、孔明は辞去した。

「彼は好い加減なことを申したのではありませんかな」

と魯粛が言うと、周瑜は、

「まあ、自らを死に追いやったようなもので、わしが詰腹を切らせたことにはならぬ。それに、一同の前で一札いれた限り、翼を生やしたとて逃げおおせるものではないわ。これから職人どもに申しつけて、わざと手間取らせ、入用の品物はいっさい使わせぬことにしよう。さすれば約束どおりにできるはずはなく、その時処罰すれば弁解のしようもあるまい。貴公、これより彼の様子をさぐって来て下さらぬか」

魯粛は承知して、孔明を訪ねた。すると孔明の言うのに、

「子敬殿、それがしの申したことを公瑾殿に洩らせばねしの命が危いゆえ、きっとご他言なきようと、あれほどお頼みいたしたではござらぬか。貴公か約束を破られたため、こんなことになったのでござるぞ。三日間で十万本の矢ができるはずがないではござらぬか。ご助力をお願い申す」

「あいや、これは貴公が自ら招かれたことではござらぬか。それがしとて、お助けしようもござらぬ」

「船を二十艘借用いたしたいのじゃ。船にはそれぞれ兵卒を三十人ずつ乗せ、青い幔幕をまわりに張りめぐらせて、両側に藁の束ねたのを千束ほど並べておいて下さらぬか。さすれば、それがしに考えがござる。三日目には、間違いなく十万本の矢をお納めいたす。ただし、これだけは公瑾殿に黙っておいて下されい。もし洩れれば、それかしの計略も崩れてしまうでござろうほどに」

魯粛は、これを承知したものの、その真意も分からぬまま、周瑜のところへ取ってかえして報告したが、船の件は伏せておいて、孔明が自分には考えがあるから矢竹・羽根・膠・漆などはいっさいいらないと言った旨だけを伝えた。

「ふうむ。ひとまず三日目にどういう返事をするか見ることといたそう」

と周瑜も首をひねったものであった。

さて魯粛はひそかに足の早い船を二十艘支度し、船ごとに三十人あまり乗せ、幔幕や藁束なぞ言われたとおりにして、孔明の使うのを待ち受けた。ところが、一日目には孔明より何とも言って来ず、二日目になっても腰を上げようとしない。三日目の四更の頃おい、孔明よりひそかに迎えが来た。舟へ行って、

「何のご用でござるか」

「ご足労でも、それがしといっしょに矢を取りに行ってはいただけませぬか」

「して、どこへ」

「しばらくお待ち下され。行けばお分かりでござる」

かくて二十艘の船を長い綱でつなぎ合わせ、北岸へ向けて漕ぎ出した。この夜、濃い霧がたちこめ、長江の中ほどは、一段と深くなって、対坐する相手の顔も見分けられぬほどであった。孔明は船を早くやるよう命じたが、霧はかつて見ぬ深さである。

（中略）

この夜、五更の頃おい、船は曹操の水上の寨に近づいた。孔明は船を西から東へ一列に並ばせ

ると、一斉に太鼓を鳴らして鬨の声をあげさせた。

「これはしたり。曹操の軍勢が討って出たら、いかがなさるご所存でござるか」

と魯粛が驚くと、孔明は笑った。

「この霧では曹操は出ようとしまい。われらは酒でも楽しんでおって、霧があがったらもどればよいのでござる」

さて曹操の陣中では、どっと上がった陣太鼓と関の声に、毛玠と于禁があわてて曹操へ知らせをやったが、曹操は、

「このはげしい霧の中を不意討ちを掛けて来たからは、伏勢があるに相違ない。軽々しく討って出てはならぬ。水軍の射手を揃えて存分に射かけてやれ」

と下知し、さらに人を陸上の陣へやって、張遼・徐晃にそれぞれ射手三千をひきい、ただちに岸辺に出て加勢するよう命じた。曹操の下知が伝えられたとき、毛玠・于禁は南軍の乱入をおそれて、すでに射手を繰り出して矢を浴びせかけており、間もなく陸上の射手たちも到着して、都合一万余人が、息つく間もなく雨のように流れに向かって矢を射かけた。一方、孔明は船を返させて、東から西へとさらに敵陣へ近づいて矢を受けとめ、また陣太鼓や鬨の声をさかんに上げさせた。かくて、朝日が上って霧が晴れかかるや、急いで引っ返すよう命じたが、二十艘の船の両側に並べた藁束には、隙間もなく矢がささっている。孔明は各船の兵卒たちに声を揃えて、

「丞相矢をありがたく申し受ける」

と叫ばせた。この知らせか曹操に届いた時には、船は足も軽く急流に乗り、すでに二十里あまりも遠ざかっていたので、追い着くこともできない。曹操は無念の牙を噛むばかりであった。

李卓吾先生批評三国志（早稲田大学図書館蔵）

さて孔明は船を返してから魯粛に言った。

「各船に五、六千本ずつはござろう。江東の力はいささかも用いず、十万本あまりの矢を手に入れたわけでござる。これなら、明日にでも曹操の軍勢が寄せて来ようと、心配ないでござろうが」

「先生はまこと人とは思われませぬな。して今日のこの深い霧をどうして知られましたか」

「大将ともあろうものか、天文に通ぜず、地理を知らず、奇門を知らず、陰陽の術をわきまえず、陣型の図を見分けられず、兵法の勢に明らかでないようでは、物の用にも立たん。それがしは、三日前にす

でに今日のこの霧を察知しておったゆえ、わざと三日と日限をきったのでござる。公瑾殿はそれがしに十日の間に造るよう命じておいて、職人や材料をおさえ、これを口実としてそれがしを殺そうとなされたのだ、それがしの運命は天にかかっておる。公瑾殿にはそれがしの命を取れはすまい」

魯粛はただただ感服するばかりであった。

船が岸に着くと、周瑜のよこした兵士五百が矢を運びに来ていたので、孔明が船から抜き取らせたところ十余万本あり、すべて陣中へ運びこませた。魯粛が周瑜のもとへ行って、孔明か矢を取ったいきさつを逐一話すと、大いに驚いた周瑜は、憮然として洩らしたものであった。

「孔明の奇智はこの世のものとも思われぬ。それがしなぞのとうてい及ぶところではない」

後の人がこれを讃えた詩に、

一天の濃霧　長江に満ち
遠近分かち難く　水渺茫
驟雨（矢の雨）飛蝗のごとく　戦艦に来り
孔明　今日　周郎を伏せしむ